

サムルノリ 初等教育における授業開発と検証報告

藤田 加代

(京都教育大学附属桃山小学校)

Class SAMULNORI Development in Primary Education and its Verification
Momoyama Elementary School Attached to Kyoto University of Education

Fujita Kayo

2005年11月29日受理

抄録：本稿は、平成15・16年度、京都教育大学附属桃山小学校三年生児童を対象に、音楽科の授業として教材開発実践をした「まねっこサムルノリ」授業実践報告と考察である。実践のねらいは、サムルノリを教材として人間関係能力を育成し、ひいては音楽を通して様々な国の人々や文化を理解するという多文化理解につながる感性を培うということである。サムルノリは、「子どもが夢中になる」「人間理解能力が培える」等の手応えを得た。

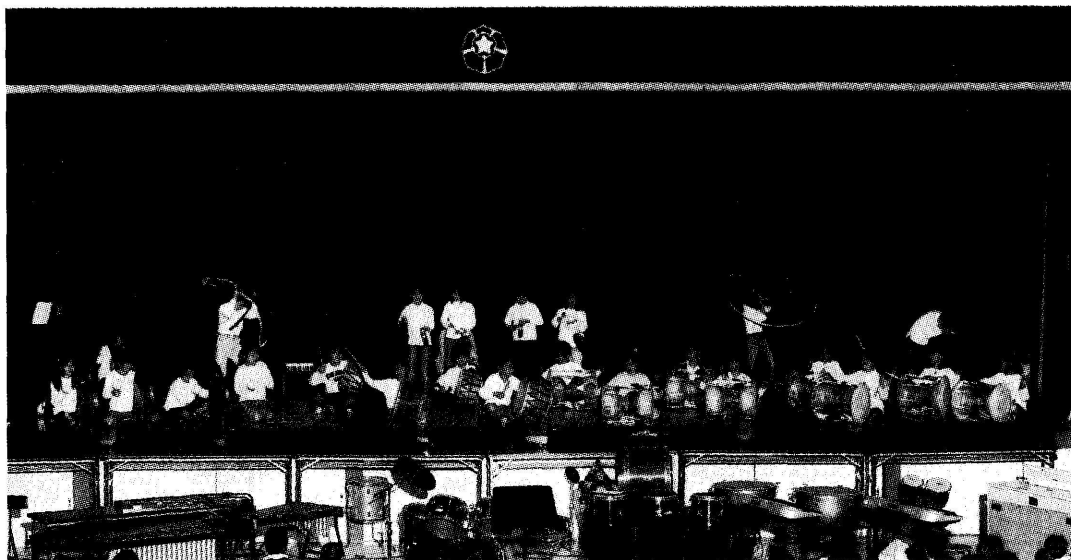
キーワード：まねっこサムルノリ 人間関係能力 異年齢協働学習 多文化音楽教育

I. はじめに

京都教育大学附属桃山小学校では、地域性を活かした特色ある音楽教育として、高学年では、民俗芸能「京都中堂寺六斎念仏」の教材化を始めとして和太鼓や琴を授業に取り入れた学習を展開している。一方、低学年では、インド舞踊やアフリカンダンスなど、芸術家をゲストティーチャーとして音楽室に招いて本物に学ぶ学習もしている。このサムルノリの授業も、学校全体で取り組む多文化音楽教育のこのような流れの中での取り組みである。

平成17年度の実践は目下継続途上であるが、1年目（平成15年度）の子ども達が生き生きと意欲的に学習した様子から、「サムルノリは三年生児童にふさわしい」という手応えを感じた。2年目（平成16年度）は先輩（四年生）が後輩（三年生）にサムルノリを教えるという、協働学習にも取り組んだ。この異年齢集団で学ぶという学習も、普段の授業では見られない学び合いの姿が見られ、子ども達にとっては新鮮で嬉しい学習になっている。そして毎年、12月に行われる学芸会では、全校児童や保護者の前で学習成果を発表している。

本稿では、2年間のサムルノリ教材化実践例を示し、児童の変容の姿から検証報告をする。

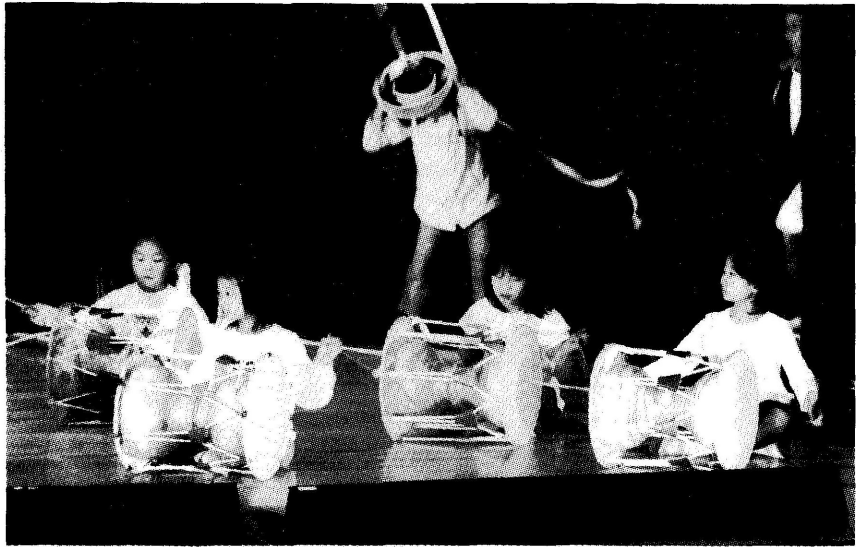


京都教育大学教育学部附属桃山小学校 『学芸会』 2004.12.4

Ⅱ. 教材化の基本姿勢

1. 本物を追究する姿勢を持つ

教材化にあたって一番大事なことは、まず教師が教材の魅力を充分知ることにある。勿論、すぐさま知り尽くす事はできないが、努力は積み重ねたい。本物に触れることが一番であるが機会はその多くない。本プロジェクトが主催する専門演奏家による実技講習会や実技練習会には、できる限り参加した。実技を体験しているおかげで、まだまだ未熟ではあるが、韓国の人たちがサムルノリの本命の魅力としているサムルノリの「マツ」(味)を、感じ取ることができ



京都教育大学教育学部附属桃山小学校 『学芸会』 2004.12.4

るようになってきた。そして、それを子ども達に感じ取らせたい思いで、いつしか身体表現で口音(クウム)を唱えている自分がいた。四年生が三年生に教える授業では、筆者と同じように体全体を使って教える四年生児童の姿があった。このことから、楽譜には書いて無いけれども、体で感じる音楽を表現したいという、「本物に学ぶ姿」を感じた。

2. 目の前の子ども達に合う授業デザイン構想を持つ

なぜ小学校の三年生が、サムルノリを学ぶのにふさわしいかという点、グループで楽しむ基本を学ぶことができるという点にある。三年生という時期は、小学校生活に慣れ、自己中心的だった低学年より一歩成長して、自分の周りが見え始める。この時期には、特に人間関係能力を培う学習が重要になってくる。練習の課程では、三年生らしい様々な人間関係づくりのトラブルが予想される。サムルノリ打楽器アンサンブルには、切磋琢磨の練習課程にそれら乗り越えていく力を付ける学習がある。

サムルノリは、チン、ブク、ケンガリ、チャンゴの4種類の楽器によるコラボレーションを楽しむ。演奏している仲間同士の息が合うようになると、音のコミュニケーション表現を自在に楽しむことができる。一つ一つの楽器は、三年生児童にとっては扱いやすい重さで、児童が使っても壊れにくい。響きを止めたり、ミュートしたり、児童にとっても味わいのある表現をする事ができる楽器である。このように扱いやすく表現力もある楽器ではあるが、だだ、音が大きいので、練習場所など、周囲に迷惑のかからないように練習する事が条件になる。

授業デザインに際しては、まず、子ども達につけたい力を明確にし、そこを出発点としてサムルノリの教材としての可能性を見取り教材化を考えた。

Ⅲ. 実践の概要

《平成15年度 2003年10月～12月の取り組み》

1. 実践学年 京都教育大学附属桃山小学校 3年1組(40名) 3年2組(40名)
2. 題材名 「まねっこサムルノリ」 教材「ウッタリブンムル」
3. 題材の目標
朝鮮半島の音楽を学ぶことで、人間関係能力を培い異文化理解につながる気持ちを持つ
4. 題材について

この題材で子どもたちにつけたい力は、仲間と共に音楽を楽しむ力を伸ばすことにある。仲間意識が著しくな

る三年生という時期には、集団音遊び体験がコミュニケーション能力をつけていくことにつながる。いろいろな表現ができる四種類の楽器で、仲間がいるからこそできる音楽表現の楽しさを追究させたい。もう一つのつけた力は、朝鮮半島の音楽を学習することで、体験を通した異文化理解のきっかけをつくってほしいことである。世界には、その地域に住む人独自の多様な民族音楽がある。音楽は人々が創造した文化である。それらの音楽を教材として学ぶことは、それぞれの地域の人々について音楽を通して文化を学ぶことである。本題材のサムルノリは、朝鮮半島の京畿、忠清地方の民俗調子をもとに作られた「ウッタリプンムル」を教材にする。今まで習ってきた音楽とは、拍の感じ方がちがう。伝統の教え方通り、クウム（口音）で唱えながら体で覚えるようにしたい。そうすることで、知識としての文化理解だけでなく、体で感じた感性を通して異文化を理解するきっかけとさせたい。

サムルノリは、プンムル（祭り囃子）を四種類の楽器による合奏で楽しもうとする芸能である。それぞれのプンムルの複雑なリズムの組み合わせを楽しむには、かなりの熟練が必要である。勿論、最終的には「ウッタリプンムル」を最後まで正確に演奏できることが目標ではある。しかし、学校の限られた授業時間の中では、目標に沿って取り組み方の工夫をすることがポイントになる。

ここでは、創造的に音楽を楽しむ「つくる」音楽学習に関連させて、「まねっこサムルノリ」とした。始めのモリカラ、タリョンチャンダン、チリチェまではクウムを唱えながら教える。その後は、自分たちで作ったリズムを続けることにする。子どもたちには、朝鮮初級学校の子どもたちが演奏する「ウッタリプンムル」を何度も聴かせて、リズムの特徴をつかむようにしておく。そのあと、「感じ取ったリズムをまねっこしよう」と働きかける。自分自身でサムルノリについて調べる学習もしている子どもたちのことである、朝鮮半島のリズムの特徴をとらえて続きの音楽を作っていくことだろう。「まねっこ」の意味には、自分の学び取ったことを音楽で表現していく楽しみを知ること期待している。

5. 学習計画（全12時間）

第一次 まねっこのお手本とする演奏映像を見て、学習の見通しを持つ。（1時間）

「まねっこサムルノリ」の学習目標を持ち追究の仕方を考える。（1時間）

第二次 始め三種類のチャンダンを一斉学習で学ぶ。（2時間）

お手本の演奏映像を時々見ながら、10人のグループでまねっこ作品づくりをする。（6時間）

第三次 作品を聴き合って楽しむ。（2時間 学芸会を含む）

6. 学びの姿と考察

〈楽器演奏のおもしろさから自ら変容する子どもが増えた〉

いつも授業に遅れてくるA男。ところがサムルノリの学習が始まると、誰よりも早く音楽室に来るようになった。サムルノリのチャンゴがとても気に入ったようで、暇があれば、音楽室に来て練習をするようになった。左手を左右に素速く移動させて演奏するチャンダンができるようになったと言っても、みんなに聴いてもらっている。それを聴いた数人の子どもが私も…と、懸命に練習を始める。その様子を見て、たちまちチャンゴ早打ち練習の輪が広がっていった。練習すればするほどおもしろくなる楽器がチャンゴだという。火付け役となったA男は、それまでは、いつもみんなより行動が遅いのでマイナスイメージで見られていた。サムルノリが始まってからは、みんなのA男を見る目が変わってきた。

このA男だけでなく、自分で作ったブクのリズムがグループのみんなに支持され、つくる意欲がますますわいてきたB男。ケンガリでチリチェのリズムがどうしてもうまく演奏できないといって、納得できるところまで練習したC子。等、等、自分で練習してみようとする気持ちが、サムルノリの楽器に出会ったことから芽吹いていた子どもの姿が多く見られた。楽器の開放的な音と、うねりのあるチンの音のこちよさに惹かれたことも大きいだろう。

学習の始め頃は、あまりの大きな音に音楽室近くの教室から騒音の苦情が来る状態であった。しかし、上手になるに伴って、音楽らしく聞こえるようになったのか、苦情も聞かれなくなった。子どもたちに「みんなが楽しむことができる音」について考えさせる良い教材にもなった。3年生という発達段階では、学校生活にも慣れ、自分と周りが意識できる時期でもあるので、音楽を通して子ども達につけさせたい力だにとらえている。

《平成16年度 2004年10月～2005年2月の取り組み》

1. 実践学年 京都教育大学附属桃山小学校 3年1組(40名) 3年2組(40名)
4年1組(40名) 4年2組(40名)

2. 題材名 「まねっこサムルノリ」異年齢協働学習 教材「ウツタリブンムル」

3. 題材の目標

朝鮮半島の音楽を異年齢で学ぶことを通して、人間関係能力と異文化理解能力をより高める。

4. 題材について

筆者はここ6年ほど前から、地域の民俗芸能「中堂寺六斎念仏」を伝承者と共に教材化することに取り組んでいる。目下、口伝傳承されてきた民俗芸能を異年齢で学ぶという実践を、教育的な手応えを得ながら積み重ねている。このことから、サムルノリも昨年学んだ4年生が、3年生に教えることができるのではないかと考えた。授業は、3年1組と4年1組を一緒にして、3年一人、4年一人のペア学習にすること。クウムで教えること。それぞれ自分なりの工夫をして教えること。…等とした。楽譜のない音楽を、人と人のつながりの中で学ぶことには、大いに教育的な意義があるにちがいない。4年生は、3年生に教えることで学びをより確かにすることができるだろう。3年生は4年生に教えてもらうことで、音楽をより身近に感じることができるだろう。そして何より期待できることは、互いに教え合う過程でコミュニケーション能力がついていくのではないかということである。

二年目の取り組みでは、一年目の目標に加えて学習法の工夫を考えた。

5. 学習計画(全11時間)

第一次 映像を見たり、楽器の話を聞いたりして、学習の見通しを持つ。(1時間)

ペア学習の相手である4年生と共に映像を見て学習目標を持つ。(1時間)

第二次 ペア学習で練習をする。(3時間)

第三次 自分たちの「まねっこサムルノリ」づくりをする。(4時間)

第四次 作った作品を聴き合って楽しむ(2時間 学芸会を含む)

6. 学びの姿と考察

〈異年齢で互いに影響しあいながら学ぶようになった〉

始めの計画では上記のように、第一次の終わりから第二次へと、4年生とのペア学習をする予定だった。しかし、他の行事が重なって、実際のところは最後に2時間のペア学習しかできなかった。今年度は、異年齢協働学習のほんの始めの手ごたえを得たにすぎなかった。以下は子どもたちの声である。

- ・4年生の中川さんに教えてもらって良かった。これからは自分でできそうだと自信がついた。
- サムルノリって楽しいんだなあ…と思えるようになった。
- ・教えるって楽しいことだと思った。
- ・楽しく自己紹介して、一つ一つわかりやすく教えてあげられて良かった。



- ・3年生の人は勉強熱心で、すぐに覚えてくれた。自分もそれを学んで、真剣に教えられた。

- ・ケンガリの持ち方など、どこでどうするかなど、できるだけ楽しくわかりやすく教えた。結構楽しく教えあえた。

ほとんどの子の感想が、異年齢で学んだことの良さについて触れていた。たとえば、4年生のD男と3年生のC女のペアは、理想的な学びができた。普段は甘えん坊で勝手な行動の多いD男であるが、下学年のC女が兄のように慕ってくることで先輩とし



での責任を感じたようだ。見違えるほどしっかりと教えることができた。この例のように、教えられる側が、先輩の言うことを良く聴いて良く覚えるとうまくいくようで、アンケートでは9割以上の子どもたちが、異年齢で学ぶことが楽しかったと答えている。学び合う姿の中には、クウムの覚え方を丁寧に書いたり、3年生が覚えるまで横で懸命に歌っている4年生の姿が印象的だった。

また、反対に4年生より3年生が上手なペアもあって、先輩の立場がない様子だったが、3年生が先輩を立てながら練習する様子に、より思慮深い人間関係能力を感じた。

勿論、うまくいった例ばかりではなく、互いの不満を訴えてくるペアもあった。そういうときはうまくいっているペアとダブルの組み合わせにして、互いによく見て学習するよう促した。個別にかかわりながら、すこしずつ成長していく姿が見られた。

平成15年度と技術の習得度を比べてみると、やはり、ペア学習がうまくいったかいなかったかで差は大きい。どの子にも、早く確実に覚えさせるには、教師が一斉に教えていく方が良い。しかし、異年齢協働学習には、教師が教えられない子供同士のふれあいがある。

写真からもそれが読み取れるように、それぞれの子どもが、自分の工夫を凝らして教えあっている。うまく出来なくても、子ども同士がふれあうなかで学ぶことは多いに違いない。

IV. おわりに

サムルノリの教材としての可能性

1. 子どもを夢中にさせる魅力がある

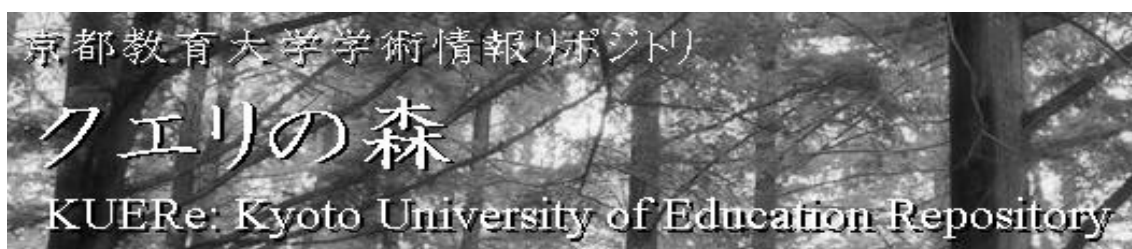
どちらかといえばリコーダーが苦手なA男。授業の始まりがリコーダー練習だった時は、様々な理由をつけていつも遅れてきた。ところが、サムルノリのグループ練習で授業が始まるようになると、いつも真っ先に来るようになった。そればかりか、休み時間も「トンタタ クタクン トタタタタ トタタタタ…」と、チャンゴの早打ち練習に夢中になった。彼一人ではなく、今まで音符が読めない等の理由で鍵盤楽器がうまく演奏できなかった児童の関心が、サムルノリのおかげで特に高まった。かつて、和太鼓学習をしたときに、これと同じ手応えを得た。サムルノリも、楽譜のある音楽に抵抗を感じている児童にとって、音楽を楽しむ新しい道を教えてくれる教材となった。

2. 人間関係能力を培うことができる

打楽器は、子どもたちにとって本質的に好きな楽器である。サムルノリは四種類の楽器をあわせてこそ楽しさが分かる。目で、息で合図しながら自分たちで合わせていこうとする様子には、今まで取り組んだ学習では見られなかった仲間を意識した行動が見とれた。「ウッタリブンムル」を正確に演奏することは、小学生にとっては難しい。そこに目標をおくと、みんながついていけない状況が目に見えている。しかし、「まねっこ」であれば、

上手に演奏できる児童がリードしていくと、それらしく聞こえるようになる。「まねっこ」だからこそ許せる演奏もある。基本のリズムは正しく学んで練習して自分たちの力量を高めながら、「つくる」部分で、「らしさ」を表現していく。このような授業デザインだからこそ、ゆるやかな人間関係の中で、「自分たちで仕上げていく意欲」が盛り上がったのだろう。

なお、この論考は、平成 15～16 年度「朝鮮・韓国」の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」および平成 17 年度「身体表現と連動した音楽演奏の学習方法とその教育的効果の研究：『サムルノリ』を教材として」（いずれも研究代表者田中多佳子音楽科助教授）の教育研究改革・改善プロジェクト経費による共同研究にもとづくものである。



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。

